

# 中島敦「プールの傍で」論

藤村 猛

## はじめに

「プールの傍で」は中島の未発表の作品であり、執筆時期も昭和八年頃としか分らない。文学的完成度は高くなく(1)、「過去帳」(昭和十一年頃執筆)系統の試作の一つだと推測される。内容は、作者の面影を持つ主人公三造が、かつて通学していた京城(今のソウル)の中学校のプールで、過去の回想を自己の「性」と絡めて語るといふものである。

中島は、昭和七年の夏に満州や北中国を旅行しており、その帰途京城に立ち寄り、数日間友人宅などに滞在している。その体験が作品に反映しているのは確かであろう。

この作品と前後の諸作品との関連を概観するならば、「プールの傍で」は、初期の習作群と「虎狩」(昭和九年三月頃執筆)や「北方行」(昭和八、十年頃執筆)・「過去帳」とを結ぶものである。朝鮮を舞台としての過去の回想という点で、「虎狩」と近い関係にある(2)し、回想という性格で、「斗南先生」(大部分は昭和八年九月頃までに執筆)や「過去帳」なども連なるし、異境の地が作品の舞台であるという点で「北方行」とも縁がある。

昭和八年頃の中島と言えば、三月に大学を卒業し、四月に横浜の女学校に勤め、同月末には長男が生まれ、生活も安定し始めた頃である。ただ、彼は妻子と同居せず、なぜか一人暮らしを数年間送る。そこには、屈折した心情があつたのではと推測される。それもあつてか、「過去帳」にあつた色濃い人生や青春の喪失感や不充足感が、この作品にも流れている。これは、それ以前の習作の作品にはあまり見られなかつたものである。確かに、習作「ある生活」(昭和三年十一月)や「蕨・竹・老人」(昭和四年六月)には、主人公たちの憂鬱が描かれているが、それはいささか想像の気味があり、取り戻すことのできない切実な喪失感とは違うものだと思われる。また、「虎狩」や習作の「巡査の居る風景」(昭和四年十一月)・「D市七月叙景」(昭和五年一月)のように、社会の問題を描き時代批判をするのでもないし、また、「下田の女」(昭和二年十一月)や「ある生活」で試みられたような、想像の中での恋愛という傾向があるが、男女間のドラマを主として造形するのでもない。「プールの傍で」は主人公の過去の様々な、彼にとつては切実な出来事を通じて、朝鮮という異境の地(だが、中島には少年時代を過ごしたかつての故郷)で自己分析や批判をするものである。

また、作中の登場人物の幾人かにモデルが推測でき、作中の三造の身辺の出来事は、作者の体験に基づいている可能性がある(3)。特に近親者の描写がそうである。しかし、その描写が「斗南先生」のように、批判はあっても無難なものであれば、中島は後年発表したかもしれないが、継母や父との争いや、また、中島の文学には珍しい(性)の事件などが私的に生々しく描かれている。それらが事実そのままというよりも、欠点を拡大するなどのマイナス方向にデフォルメされた可能性を否定できない点に、文学に高い理想を求める中島(4)にとつての、この作品の未発表の一つの理由が想像される。

研究者にも取り上げられることのほとんどない小編であるが、この作品に描かれたもの、特に主人公や女性の造型、および彼らの関係の描写などを見ていき、前後の諸作品との関連や作品の特色を、本文を讀み解くことにより考察していく。

## 一

「プールの傍で」は全三章で構成されている。と言っても、二章が作品の三分の二以上を、一章がその残りの大半を占め、三章は『中島敦全集』で言えば1ページ分しかない。(因みに、「プールの傍で」は全2ページである。)

また、作品内の(時間)は、作品の現在である三造がプールにいる夏の午後と、過去である彼の中学時代との二つに分けられ、現在と過去が交互に登場する構造になっている。プールに佇む三造が旅行の疲れともうさど、かつ、思い出の地「京城」にしていることによって、過

去の自分が現れ、過去の出来事を回想するという、意識の流れを描いた一種の心理小説とも言える。

作品中に、その移り変わり(過去・現在の変転)が巧みに描かれている。以下、作品の流れを簡単に見ておく。

一章では、八年ぶりに訪れた母校のプールで泳ぐ三造の念頭に、一昨日訪れた奉天和八年前の修学旅行時の奉天が重なり、場面は過去になる。二章では棒高跳びの選手の姿から、中学四年生の時分の回想が始まる。継母のこと、黒猫のことなどの回想が続ぎ、また、現在に戻る。その時の三造の状況を、次に引用する。

水の上に軽く浮いてみた彼の気持を、回想が静かに快くゆすつた。彼は眼をうすくあけて真上に拡る夕方の空を見た。少年の日の青空は、今見上げる空よりも、もつと匂やかな艶がありはしなかつたか？ 空気の中にも、もつと、華やかな軽い匂ひがあつたのではなかつたか？ 思出したやうに吹いてくる風は、時々、濡れた顔を心地よく撫でて行つた。三造は、旅の疲れのものうさと、帰郷の心に似た情緒との交つた甘ずつばい気持で、長々と水の上へ伸びをするのであつた。(二)

続いて、猫を交えた父との諍いの回想が語られ、また、現在に戻る。

追憶が今度は若く彼の心を噛んだ。いきなり彼は水の上で身をひるがへすと、顔を見ずにつけたまゝ、足をバタ／＼させて、クロオルの真似事をやり出した。(二)

その後、彼はプールの傍に来た十一・二歳の朝鮮の少女を見て、「その汚らしい女の子の後姿が、彼に、彼の最初の妖しい経験を思ひ出させる」。この経験の描写が、『中島敦全集』で言えば、以降6ページ分

続く。全体が2<sup>2</sup>ページであるから、作品の四分の一以上を占める事件である。

その三造の冒険の描写が終わると、また場面は現在に戻る。

プールの上を渡る風が、そろ／＼寒くなってきたやうである。

半身を水から出して立つてゐた三造は、くしやみを一つすると、もうあがらなければいけない、と思つた。(中略)やつと上がりきつた時、右の手が滑つて、たたきの角で一寸肘の所を擦りむいてしまつた。(二)

怪我をした三造はプールから離れるが、傍の木に朝鮮鴉がいるのを発見する。そこで、彼が近寄つていくと、「鴉は短い濁つた鳴声を残して、飛び立つてしま」う。怪我と不吉な雰囲気の鴉からの連想ではなからうが、次に、「妖しい経験」の後に彼を襲つた「制裁」―上級生による暴力と、それに対する三造の「憤り」や口惜しさなどが描かれる(5)。この感情が、現在に戻つた三造が眼前に見るたくましい中学生へのひげめと相まつて、文末の「上級生に打たれた時に感じた、あの『肉体への屈服』と、『精神への蔑視』とを、彼は再び事新しく感じ」させるのである。(付け加えて言う、この上級生による制裁に関する事柄が2ページ分近くあるから、実に作品の三分の一は、この「妖しい体験」とその後の制裁に充てられている訳である。)

三章の冒頭は「ラクビイの選手達はみんな引き揚げてしまつて、運動場には誰もゐなかつた。」とあり、作品冒頭の「グラウンドではラクビイの選手達が練習をしてゐた。」と照応している。

時間の移り変わり、夕暮れの進行と共に夏の終わりををも連想させて、過去と現在の流れる「時間」の性質を暗示してはいまいか。「はじめ

に」でも触れたが、作中には青春への回顧の情が底にある。ただ、それが「過去帳」ほど強くないのは、主人公が置かれている状況の違い、即ち、三造は、現在中学を卒業して大学生であるのに対して、「過去帳」の方は卒業数年後の勤め人故であらう。青春へのスタンスの取り方の違いが、作品の雰囲気の違いを生じさせていると考えられる。つまり、意識の上でのことだが、前者は青春晩期にしても、まだその中にいるのに対して、後者はそういった時代を通り過ぎた位置にいるということである。

## 二

前節でも見てきたように、「プールの傍で」は、過去の様々なエピソードによつて成り立つており、それらを再度まとめて言えば、主要なものは主人公の中学校生活・彼と父の諍い・娼婦との一夜・上級生による暴力などである。注意しなければならないのは前述のように、この作中の出来事の多くは作者の実体験の可能性もあるが、逆に虚構の可能性もあるということである。

例えば、父との諍いとの原因となつた黒猫は、中島の中学校時代の作文に登場する猫と似ているとの友人の証言がある(6)。しかし、作者が中学四年生あたりから不良がかつていくことや、継母とうまくいっていない、関連して父とも諍いがあつたであろうことは想像されるが、娼婦との経験(や上級生による暴力)が事実かどうかは不明である(7)。一つの傍証として、中島が昭和七年の京城滞在の時、娼街に行つていたという友人の証言がある(8)。だが、その時の体

験が作品の描写に役立っているのは確かにしても、中学生の時に娼婦と一夜を過ごしたというのは虚構の感じがする。何故なら、作中で三造が「ポオルとヴィルチニイ」を読みながら、娼婦の横で何もせずに一夜を過ごしたというのは、小説の題材としては面白いが、どこか作り物の感じがするからである。

いずれにしても、この冒険が後の上級生による制裁の原因となり、その暴力に対する三造の心情―「肉体への屈服」と「精神への蔑視」―を生じさせる。ただし、この三造の心情は、作者としては意味を持つのだろうか、作品では問題提起で終わっており、中途半端の感は否定できない(9)。これは、「虎狩」で上級生に殴られる趙の心情とも似通っているが、「虎狩」では、そこから趙の詳細な描写が続き、別の面の彼の姿やその後が描かれていて、断片的描写ではなく、彼の深みと成長が分かるようになっていいる。やはり、「プールの傍で」は中断と中途半端の感が否定出来ない。

だが、娼婦との一夜の描写は作品のクライマックスであり、それを小説化しようとした姿勢とその内実を、点検・評価していく必要はあろう。回想であることや中学生という限界はあるにしても、それまでの習作群には見られなかった、一歩踏み込んだ〈性〉を持つ主人公の描写がそこにある。

娼婦との一夜の冒険は、それまでの作中の春画や「不自然な性行為」とは違い、「時として、どうにもならない爆発的な力」(二)と表現される性欲に直接結びつくものではない。伏線の一つは、黒猫への愛情と裏腹にある彼の孤独感であり、何かを求める彼のロマンティシズムであろう。

一匹の黒猫を例外として、彼は誰をも愛さなかつたし、又誰にも愛されなかつたやうに思はれる。(中略)夜になると、彼は、小学校の時から飼つてゐた大きな黒猫を抱いて寝た。その真黒な獣がゴロ／＼と咽喉を鳴らすのを聞きながら、その柔かい毛の感触を咽喉や顎のあたりに感じながら、彼は毎晩寝に就いた。そのやうな時だけ、彼は、その肉親に対する軽蔑や憎悪を辛うじて忘れることが出来た。決心した通り、彼は決して家族と言葉を交さなかつた。(二)

小動物への主人公の愛情は、「北方行」や「過去帳」にも出てくるし、周辺の人々の証言から考えて、似たようなことはあつたものと推測される。ただし、作中に描かれた家族への軽蔑や憎悪は、多く誇張気味であり、晩年(昭和十七年)に付け加えられた「斗南先生」の末尾―「十年前の彼は、自分が伯父を少しも愛してゐないと、本気で、さう考へてゐた。人間は何と己の心の在り処を自ら知らぬものかと、今にして驚くの外はない。」―のように、それは自己中心的な感慨であつて、後年の中島にとつては反省の対象となつたろう。

孤独感の中にいた三造は友人たちと背伸びして、学校の規則を破ることに満足を感じるような学生時代を過ごすか、次の描写から、彼には性欲とロマンティシズムが混在しているのが分かる。

それにもまして、たまらなく彼の気持をそ／＼り立てたのは、夜の街の灯であつた。夜になつて、街に灯がはひり出すと、どうにも彼はちつとしてはゐられなかつた。彼は顔の面皴を気にしながら、こつそりと継母の美顔水をつけたりして、ふら／＼と街へ出て行つた。何か空気のふくらむものはひつてゐるかのやうであつた。

飾窓の装飾も、広告燈も、朝鮮人の夜店も、灯の光の下では、すべてが美しく見えた。さういふ夜、若い女とすれちがつた時の、甘い白粉の香は、少年の三造を途方もない空想に駆立てた。

(二)

三造には性欲と共に、「彷徨を好む氣質」(「斗南先生」)があり、彼の言動や心情の多くは、「ロマンティズムにエグゾティズムにそゝられたため」(「斗南先生」)ではないか。

三

回想の中核をなす娼婦との冒険は、ある晩、「一人の友達と一緒に街を歩いてゐる」時から始まる。家族との反目から「三造は家へ帰りたくない」、「出来ることなら、何時迄も歩いてゐたかつた」。そういった心情と冒険心から、「二人は何のこともなく微笑し」て、娼婦街へと通じる道を歩いて行く。そこでは、「低い土造の朝鮮家屋の門毎に、真白に塗立てた女達が四五人づゝ立つてゐ」て、不慣れた日本語で呼びかけ、「しつこく彼等を離さなかつた」。その結果、「彼等はすつかり狼狽し」逃げ出すと、「その角を一つ曲つた所に、思ひがけなく、又小さな低い土の門があつて」、「今度はたつた一人の女が立つてゐ」るのを見る。三造は、女に「どうしたはずみか、ひよいと」笑いかけてしまう。女は勘違いして、「小さな手で、しつかり彼をつかまへ、もう一度笑ひながら『イキマセウ』と言」う。

彼は反射的にその手を払ひのけた。女は案外弱く、よろよろとよろけたが、彼の制服の上衣をつかんだ手を離さなかつた。三造は

もう一度烈しく女を突飛ばして身を退いた。ピリツと布の裂ける音がした。彼の上衣のボタンが二つ三つ土の上にくろがつた。そのいきほひに女は驚いて手を放し、瞬間、許しを乞ふやうな女らしい表情を浮べた。が、すぐに今度は、急いで、そのボタンを拾つた。「ボタンを返してくれ。」と、彼は手を出しながら言つた。女は嬉しそうに笑つて頭をふつた。「返してくれよ。」と彼はむきになつてもう一度言つた。女は又笑つてボタンを見せながら、後の家を指して、不器用な口つきで言つた。「アガンナサイ。」

三造はしばらく女を睨んでゐた。

(二)

女がボタンを返さないで、彼は腹を立てて、歩き出す。「彼等がもの半丁も歩いたかと思ふ頃、後からバタ／＼と小刻みな足音が聞え、女がボタンを返しに追つてきた。三造は、街灯の下で女を改めて見る。

女は小柄であつた。まだ子供だらうと思つた。描眉毛もうすく、鼻もうすく、唇もうすく、耳も肉がなく、小さかつたが、大きな朝鮮人らしくない、くり／＼した目附が割にその顔を派手にしてゐた。下袴はうすい紅で、右の腰のあたりで、大きな蝶結びに結ばれてゐた。安物らしくピカ／＼光つた上衣の袖から、華奢な小さな手が出てゐた。

ボタンを渡すために女は三造の手を求めた。彼は手を出した。少女はボタンを置き、そのまゝ自分の手を彼の手の中に握らせた。柔かく冷たく、しめり気のある感触であつた。少女はその姿勢のまま、ちつと真直ぐに三造の眼を見上げて言つた。

「キナサイ。」

それは少しも媚を含んだ態度ではなかつた。あたりまへのごとを請求するやうな態度であつた。三造は、妙な混乱を――先刻のとはちがつた種類の混乱を感じた。彼は、彼の手の中にある少女の小さな柔かい手を強く握つて、「さよなら。」と言つた。

(二)

彼はその場を立ち去ろうとする。「とつさに少女は」「彼の手をしっかりと握り、「黒瞳でかれを見上げた、その表情に、その時、はじめて媚らしいものが現れ」る。三造はそれを振り切つて去ろうとするが、「三十歩ほど歩いてから振り返ると、先刻の街灯の下に、まだ、あの少女の立つてゐるのが小さく見えた。」彼は友人に嘘を言い、「自分の興奮と動悸を静めるために、ことさらに大股に、今おりて来た坂道をまた登り始め」、彼女に会いに行く。

ボタンを返してくれた少女の善意と、「柔かく冷たく、しめり気のある」手の感触や、黒瞳の訴えるものなどが、彼に「妙な混乱」を与え、その場を去つた後の「街灯の下に、まだ、あの少女の立つてゐる」姿が、彼をして彼女の元に行かした。それは明らかに性欲からではなく、客のいない彼女への同情からであろうし、先程は逃げた臆病心を破ろうとする背伸びによる冒険心や好奇心もあつたものと思われる。つまり、彼の抱いた「妙な混乱」は、先刻の娼婦たちから逃げ出した時のものとは違い、娼婦ではなく「少女」の与えるものだろう。別れた後も彼を見ている「少女の立つてゐる」姿が、彼には愛情の存在を感じさせたのではないか。いわば孤独な彼女の可憐な誘いに、孤独な彼が答えたのである。それは、彼の飼ひ猫が「うすよこれ艶を失い、「よく風邪をひいて、くしやみをしたり、涙を垂らしたり」する

故に、「家のものは皆、彼女をひどく嫌つた。それがまた彼には、猫をいどほしく思はせる」心情と繋がつていようし、「斗南先生」での伯父が死ぬ時に、主人公が感じた「不思議な感動」に近いものである。ただし、それが近親者ではなく、他人である一娼婦へあつた点は注目し得る。習作の「ある生活」や「下田の女」で欠けていた幼いが自然な恋心（とまで言えなければ、同情心）の発動の描写が、ここにはある。

四

場面は彼女の部屋に移る。「その部屋は天井の低い三畳ほどの温突で、「少女は彼を連れて部屋にはひると、堅い床の上にペタリとんび足に座つて、鏡をのそいて紅を唇にさした。」。三造は買春のためにではなく、値段の交渉をする。

弱々しさうな身体つきと顔立をした少女が、やさしい表情をしなから、変な日本語を使ふのが、彼に妙な気持ちにさせた。（中略）それと知らないで、しやべつてゐるのは、彼女の表情とちぐはぐな滑稽なものを感じさせた。

(二)

少女の魅力が、一種のエキゾティシズムと相まって描かれている。三造は少女に惹かれるが、彼女は娼婦として、自分の勤めを果たそうとする。それを受けてか、呼称も「少女」から「女」に変わる。しかし、三造は性欲から、即ち買春をしようとして、ここに来た訳ではない。彼は、「自分の意図」――「かういふ所を見に来ただけ」――を女に伝えようとするが、うまく伝わらない。女は三造に、往來のやり取り

から推測しても、稼ぐためだけの「好意」を見せかけていたのではなく、彼が再度やって来た時には、商売気を離れたものを感じていたのではなからうか。ただ、彼女のその愛情の表現は、「売春」という行為である。三造の好意（愛情）は、金による押しつけたものという面や、年齢による幼さという面はあるにしても、性欲から彼女を抱かないところにある。両者の思惑が異なつた結果、女は困惑せざるを得なくなる。

女は彼を訊ねるやうな眼附で見上げた。

女は全く当惑しきつてゐた。

女は手持無沙汰で困惑した面持であつた。

三造は彼女に、自分を放つて置いて「寝るんだよ。」と繰り返す。

しかし、彼自身も余裕があるわけではなく、持参した小説を読んで時間を費やそうとするが、「気が散つて、同じ所を幾度読んでも、中々意味がとれ」ず、「読んでゐるふりを続けて」いたのである。

女は益々困つたやうな、泣笑ひのやうな表情をした。彼女には、どうにも、客の気持がのみこめないものであつた。彼女は、間の抜けた、困惑しきつた微笑を浮べて横に首を曲げながら、媚びていゝものか、どうか、といふ風に、客の顔をうかがつた。

三造は、女に「やや烈しい口調で」寝るように指図すると、「彼女は怯れたやうに身を退」く。

彼が機嫌を悪くしてゐる時、それに媚びようとする彼の黒猫の眼附が、今のこの女の表情に似てゐた。突然彼は上衣の内ポケットから財布を出し、五十銭銀貨を四つ取出して、それを彼女の鏡台

の上に重ねた。彼女は、更に恐れたやうに、三造と銀貨とを見較べながら、手を出さうとしなかつた。彼はふと、女が可哀さうになり、やさしい調子で言つた。

「いゝんだよ。怒つてるんぢやないんだ。いゝから銭をとつて、お前だけ寝ればいゝんだよ。」

女はまだ怪訝な表情を続けてゐた。（中略）その中に女は立上つて、今度は、ほんたうに、身仕舞をして、床にはひつたやうであつた。

以上が、上級生による制裁を除く「妖しい体験」の顛末であり、最終文の「床にはひつたやうであつた」という推測が、この夜の締めくくりと、三造の位置―善意ではあるが、彼自身も余裕がなく困惑している―を象徴していよう。

また、引用文中の「彼が機嫌を悪くしてゐる時、それに媚びようとする彼の黒猫の眼が、今のこの女の表情に似てゐた」や、「彼女は、更に恐れたやうに、三造と銀貨とを見較べながら、手を出さうとしなかつた。彼はふと、女が可哀さうになり、やさしい調子で言つた。」からも分かるように、女の恐れが三造にやさしさをもたらすのである。彼の孤独な心が癒され、他者との心の交流を感じる時だろう。実母を知らず、二人の継母に愛されることもない、自己嫌悪の強い三造にとつて黒猫が唯一の救いであつたように、少女の存在はそれに近い。

だが、その奇妙な状態には注目せざるを得ない。他者に貶められる弱者の悲しみが、三造を打つのである。彼は弱者に、自分自身を見るのかもしれない。後に、「北方行」で無軌道な生活を送る伝吉を打つたのが、同棲相手の連れ子である二歳の男の子の孤独であつた。伝吉

は男の子の孤独な姿にかつての自分（「母を知らぬ少年」）を見たのだろう。同様に、「プールの傍で」の娼婦の如き弱者に対する三造の同情・愛情・共感がある―その背後には、作者がいよう―とすると、彼は弱者に自己を見るのと同時に、相対的に、強者としても存在しているのではないか。また、その延長線上に、「悟浄歎異」中の弱者たる悟浄と「優者」としての三蔵法師の両存在のように、どこかで作者は心情的に重なり得るということを暗示してはいまいか。つまり、中島を「ある生活」のマサキのように、弱者としてだけ考えるのは偏っているのかもしれない、彼の中には、見る者―作家として見る者―としての強者がいるのかもしれない。

だが、「プールの傍で」の三造は、相対的に少女に対しては、強者として対するが、弱者に同情・共感するし、一般人のように彼女を蔑視していないことを確認しておきたい。逆に、彼は肉体的優越者に対して、卑屈な思いを抱いている箇所が散見される。彼は自覚的にとまでは言えないにしても、弱者と強者の間で動いている。

次に、この事件（娼婦との一夜）に対する現在の三造の思いを考えると、この事件に接続していく文章（本稿一節で引用したもの）に、その解答があろう。

三造は怪我をして垂れる血を見て、「他人事のやうに綺麗だなと思」い、朝鮮鴉の描写へと続く。ここに描かれる寒さやくしやみ・血・朝鮮鴉などのイメージを連続させてみると、これは「妖しい経験」への、拡大して言えば、少年時代への現在の三造の思いや位置を暗示してはいないだろうか。それらは夏の盛りを過ぎたイメージであり、ロマンティズムの持つ華やかなイメージとは違い、どこか前途への不安感

や青春の盛りを過ぎたような焦りや物憂げなものが漂っている。緊張感に満ちた娼婦との出来事と違い、現在の三造は旅の疲れも加わり、弛緩した状態にある。「少年の日の青空は、今見上げる空よりも、もつと匂やかな艶がありはしなかつたか？ 空気の中にも、もつと、華やかな軽い匂ひがあつたのではなかつたか？」（二）と、三造は感じてゐる。この状態は、「北方行」の伝吉の無気力さを連想させる。即ち、彼は、不充足の状態に陥ろうとしているのではないか。「過去帳」や「北方行」の主人公たちが、現在の三造の延長線上にいるのだろうか。が、伝吉たちの持つ女性への不信感や幻滅に近いものを、回想される三造（「プールの傍で」）は、彼が中学生であるためか、持っていない。と言つても、現在の三造がそうだという保証はない。むしろ、過去の自分の純情さや、それ故の葛藤を噛みしめているのかもしれない。八年後の三造は倦怠の中にいる。

## 五

三章ではラグビーの選手たちのいなくなったグラウンドや、「ゴオルだけが寂しく残つて・日はすでに落ちて・空の色は次第に黒みを帯びた紺色に変わりつゝあ」る情景が描かれる。ただ、プールには競泳の選手の二人の中学生が泳いでいる。彼らは、「鮮やかな泳ぎぶりであり、良い体格をしてゐた」。三造は自分の貧弱な身体と比べて、彼らを「此の上なく羨ましいもの」に思い、次のように感じ、作品は終わる。

丁度何年前、上級生に打たれた時に感じた、あの「肉体への屈服」と、「精神への蔑視」とを、彼は再び事新しく感じるのではあ



つた。

(三)

これらは、前述したように問題提起で終わるが、「虎狩」、続いて「かめれおん日記」でも主人公の感慨や問いかけとして繰り返されている。この点を考えると、この時期の中島にとって、それらは作品で展開したいテーマだったと思われる。つまり、肉体的弱者として、如何に他者と関わるかという倫理的な疑問である。これは、弱者である娼婦とは逆の場合の対処の仕方への問いかけである。

「かめれおん日記」から該当部分を、次に引用する。

まことに意気地の無い話だが、私は、暴力―腕力に対して、まるで対処すべき途を知らぬ。勿論、それに屈服して相手の要求を容れるなどといふ事は意地からでもしないけれども、たとへば、殴られたやうな場合、どんな態度に出ればいいのだらう。此方に腕力が無いから殴り返す訳には行かぬ。口で先方の非を鳴らす？ さういふ時の自分の置かれた位置の惨めさ、その女のやうな哀れな饒舌が厭なのである。その位なら、いつそ超然と相手を黙殺した方がましだ。併しその場合にも猶、負惜しみの弱者の強がり（傍人に見るのは差支へないとして）自分に意識されて立派とは思へない。（中略）暴力の侵害（腕力ばかりでなく、思ひかけない野卑な悪意、誤解なども之に入れていい）に打克つだけの力を備へてゐるのは結構に違ひないが、相手に対抗し得る腕力・権力を有たないでゐて、（或ひは有つてゐても、それを用いず（唯精神的な力だけで悠揚と立派に対処し得る人があれば、尊敬してもよいと思ふ。それはどんな方法によるか、私には想像もつかない。

(四)

主人公のプライドの高さには注目されるが、暴力の前になすすべのない状況を打破したいとの願望と、それができないとの困惑は、「プールの傍で」から引き続いてのものだろう。

中島はその解答を考え続け、作中で一つの解答を出す。それが、後年の「悟浄歎異」中の三蔵法師の持つ「内なる貴さ」であろう。それは精神的な高みにあるため、弱者である悟浄には得られないものであるが、他者に与えられる愛として、彼の進むべき一つの道として示される。「プールの傍で」執筆時期頃の作品では、まだそれは明確にされておらず、問いかける入り口にすぎなかつた。恐らく「プールの傍で」で彼の書きたいものは、そういった観念的テーマよりも、過去の娼婦との一夜に表れたやうな、自己の〈実感〉・〈人生〉ではなかつたか。

主人公の感情の起伏の激しさは青春の混乱であり、それはコントローラされなければならない、たとえそれが青春の終わりだとしても、作家たんとする者にとつて、自己は制御・解明されなければならないと、意識されていたのではないか<sup>(10)</sup>。そのためにも、自己の葛藤や混沌は、何度となく書かれなければならなかつたのだらう。

やがて、中島の暴力への対応の苦慮は、「内なる貴さ」を併せつつ、運命や時代の悪および不条理への抗議の念や悲しみと拮がり、それに苦しむ人々―例えば「山月記」の李徴や「李陵」の司馬遷や李陵など―を作品の対象に選ばせ、作者の共鳴により、作品と作者自身が共振していき、彼らの苦悩や自己主張の姿を生彩あるものにさせたのであろう。

「プールの傍で」は、様々な回想を作中に取り込みつつ、過ぎゆく

青春への思いを滲ませながら、〈性〉を前面に出し、中島のこの時期のテーマ―他者と如何に関わるかという問いと、どう対応していいか分からず混乱する自己の分析―を、考えようとし始めた作品であり、次なる飛躍のために、過去を眺めやり整理しようとした作品であると見えよう。だが、そのためには、「北方行」や「過去帳」の文学的模索―より徹底した自己の追究と表現―がまだ必要であった。

注

- (1) 「ブルの傍で」は、研究者に取り上げられることも少ない。取り上げられても簡単に触れられているに過ぎない。例えば、濱川勝彦氏は、この作品を「斗南の血をうけた自分の経歴―過去を顧みることによって自己を確認しようとする作品」とし、三造の態度を「自己及び自分をつつむ一切のものへの厳しい態度」とされ、「やがて『狼疾記』『かめれおん日記』を生み出す源泉となる」と評価している。また、鷺只雄氏は「回想の核をなすものは朝鮮や満州のエキゾチックな風物と性への目ざめ」だとされ、「そこには作者の耽美的な発想があらわ」だと批判する。

濱川勝彦『虎狩』まで(『中島敦の作品研究』明治書院 昭和五十一年九月)

鷺只雄『虎狩』(『中島敦論』有精堂 平成二年五月)

- (2) 奥野政元氏に「同じ回想ではあっても一方は自己の内面へと

深く分け入っていくのに対し、他方は逆にある特定の対象へと回想が外に向かっているのである。」という指摘がある。

『北方行』の「側面」(『中島敦論考』桜楓社 昭和六十年四月)

- (3) 中島の中学生時代からの友人たちの証言によれば、中島の家庭の不幸はよく知られたものであり、彼が中学生の四年生頃から、学校をさぼり始めたのも事実らしい。また、杉原氏が「ブルの傍で」のモデルの一人だという指摘(小山氏)もある。小山政憲『校友会雑誌』その他のこと、杉原忠彦『三角地のことなど』(『中島敦・光と影』新有堂 平成元年三月)

- (4) 中島の文学の理想の高さは、様々な小説に散見されるが、彼の遺稿である「章魚木の下で」にもっとも端的に表れている。

- (5) この事件の描写が後に、「虎狩」の趙への制裁事件の造型に影響を与えていよう。

- (6) 伊東高麗夫「興味ある存在、中島敦」(『中島敦・光と影』新有堂 平成元年三月)

- (7) 中島のこの時期の女性遍歴の実体は不明であるが、「北方行」の伝吉の回想によれば、「初めて知ったのは中学の四年の時、年上の友人にさそはれて行つた私娼窟であつた」(第三篇・三)とある。断定はできないが、中学四年の時に、何らかの事件があつたのかもしれない。

- (8) 山崎良幸「中島君を憶う」(『中島敦・光と影』新有堂 平成元年三月)

- (9) それ故に、他の作品で同テーマを展開する必要があつたとも

(10)

考えられる。注(2)参照。

「過去帳」や「北行」に、似たような感慨が登場する。その一例。

「曾て自分にも多少は感覚の良さがあつた時分には、私はそれのみ奔ることを惧れて、自分の欲しもしない・無味な概念のかたまりを考へることによつて感覚を鈍くしようと力めた。」

「かめれおん日記」二二

(ふじむら たけし)